高岡教区

教区報

2015
6月号

念仏のこころに生きる生活を

☆第一五回世界仏教婦人大会に一六〇〇名以上の参加

去る五月三十日(土)・三十一日(日)、カナダアルバータ州カルガリーに於いて、第十五回世界大会仏教婦人会大会が開催された。参加国は北米(二百五十三名)、南米(百五名)、ハワイ(八十名)、カナダ(百九十名)、日本(千二十八名)の五カ国。高岡教区仏婦連盟では五月二十七日～六月三日の日程で、二十五名の参加のもと、富山教区仏婦連盟十九名と合同で大会に参加した。この大会の様子を石野順子仏婦連盟委員長にご報告いただきました。

会場、カルガリーテラスコンペンションセンターは広く、メイン会場の座席配置もゆったり感じられ、ステージ両サイドに大きなプロジェクターフローンが設置されていて、遠くでも動きや表情は十分に把握できるすばらしい会場で大会が行われました。

大会一日目は、広島雅楽会演奏の美しい旋律が響く中、ご門主様のご入場、来賓、大会旗、そしてカルガリーのポリス三名が入場し、厳粛にかつ華やかに開会式セレモニーが進行し、全員が起って「真宗宗歌」を歌いました。三題目の歌詞が真実味を帯びて胸にせまったのを思い出します。

日本語記念講演では、シンガーソングライターのやなせななさん（奈良教区・教恩寺住職）が「いのちの　ふるさとを求めて」とのご演題で、両親のこと、祖母のこと、ご自身のことを語り、いのちのつながりを伝えてくださいました。トークの途中に何曲も歌を挿んでくださって一時間半がアッと言う間に過ぎていきました。

午後は、ワークショップまたは「カルガリー仏教会」への参拝ツアーが行なわれました。私は、ワークショップC正語の会場へ参加し、「先住民からみた『一如』」と題して、レジ・クローシュー博士が先住民の価値観、習慣や信仰などと、八正道の類似点を語られました。白人の考え方と先住民の考え方に大きな隔たりがあるが、お互いが分かり合えるようになればいいと穏やかに話されたことが印象に残っています。

また、ワークショップA正見・浄土真宗カナダの歴史の会場では、何人もの開教使が日系社会を支えお念仏の種を植えられたこと、今では日系人以外の方々にも浄土真宗が広まりつつあることを伝えていただきました。

夕食懇親会では、プレゼント交換が行なわれ、流暢な英会話、あるいは片言の単語で、和やかな楽しい時間となりました。また、やなせななさんのコンサート、評議員さんの歌、各教区からの出し物があって拍手の連続。食事も美味しく、みな大満足の交流でありました。

二日目のスタートは、カルガリー歓迎ホワイト・ハット儀式。続いて世界仏教婦人会連盟総会、英語記念講演の御講師は、カナヤ・ウスキ・パトリシア開教使が話され、日本から移住した祖父の苦難、大戦の勃発により全てのものを没収されたが「ナムアミダブツ」はしっかりと守ることができたことなど、内容豊富で大切な言葉を沢山、語られました。午後には体験発表の後、閉会式が行なわれ、感動に包まれた大会日程が終了しました。

今大会は終始一貫して、大会テーマ「いだかれて　ともにつながる　わたしのいのち」にアプローチする姿が印象強く、会場を去るのに心残りを感じたことです。

次ページへ

大会に先立ち、トロントに二泊。ナイアガラの滝を展望し、船で滝壺遊覧を楽しみました。映像で観るのと違って、轟音の大迫力と突然に襲う風に舞う滝の霧雨に興奮。大会後、バンフに二泊し、世界遺産のカナディアンロッキーの観光に行き、世界一美しいと言われるレイク・ルイーズの湖畔を散策、車窓から見る岩峰の数々と周囲の風景を映す湖に歓声をあげ、クロクマがタンポポの根を食べている光景に停まってくれるバスに感激等々・・・数え上げてもきりがありません。

六月三日、全員元気に富山空港に帰ってきました。日本の二十七倍という広大な国土のカナダ。果てしない大草原、美しい森と湖の大地、恵まれた大自然を満喫しつつ、大切に自然を守るカナダの国民性にふれることができたことも、大会テーマと重なるところがあり、八日間の旅行は意義深いものでした。

この大会に参加できましたこと、各方面に感謝申し上げます。ありがとうございました。

※富山教区との全体写真

★射水組仏婦連盟総会が開催される

去る五月二十四日(日)第四十九回射水組仏教婦人会連盟並びに尼講総会を西岡孝了教務所長石野順子教区委員長、岡西好持仏婦担当職員、射水組金山證組長のご臨席を賜り、全員二百二十名の参加を得て開催できましたことは大変うれしくありがたく思いました。

誓光寺の本堂に響く行事鐘の音が二百二十名の参加者の心を一つにまとめるように感じました。厳粛な中、真宗宗歌を合唱し、献灯・献花と進み参加者全員で「宗祖讃仰作法(音楽法要)」のおつとめをいたしました。満堂に響きわたる「南無阿弥陀仏」の念仏は、年毎に声量も豊かになり、ご縁に遇わせていただいた喜びを感じる一瞬でもあります。

総会では、平成二十六年度報告、二十七年度事業計画予算・役員の改選等の総て拍手をもって承認されました。

午後からは、組内住職様方の参勤を賜り厳かに物故者追悼法要を挙行いたしました。年度内にご逝去なさいました二十四名の方々には、今まで仏教婦人会をお育てお導きくださいました尊い愛しい方々で、胸を篤くこみ上げてくるものを感じた次第でございました。

その後、記念講演は西岡孝了師より「つたわる」と「つたえる」ということ～「宗務の基本方針」の具体化に向けて～　と題してお話をいただきました。

「つたわる」はこだまの働きで「つたえる」ことは　私が行動を起こすことと聴聞させていただきました。

これからも　仏教婦人として私の歩む道をしっかりとわきまえて、み教えになにを問い聞いていけば良いのか、ということについて語りあえる、み法の友の輪を広げていきたいと思いました。（肥田智子前射水組委員長）

若手僧侶が仏教講座を主催

去る五月三十日、新湊組青年僧侶会・声明会（石丸誓史会長）が釈徹宗氏（相愛大学教授）を講師に招き仏教講座を開催し、会場の高周波文化ホールには約三百名の参加者が集まった。

同会ではこれまでも年に一度、仏教講座を実施していたが、今回は公共の会場を使用しポスター千枚を各地に掲示するなど、広く一般の方々にも呼び掛けを行った。ＮＨＫの番組『落語でブッダ』への出演経験もあるご講師からは、「落語のなかの浄土真宗」というテーマでお話しをされ「日本の芸能の多くが宗教儀礼の模倣にルーツを持っています。落語の持つ高い文化性と宗教性を知れば、もっと仏教も面白くなると思います」などと語られた。

○非戦平和公開学習会が開催

五月二十七日、西本願寺高岡会館において今年度第一回目の非戦平和公開学習会が開催された。今回は内田正敏さんの著書である『靖国参拝の何が問題か』の第一章を中心に学習会を行った。発表者は教区委ヤスクニ問題専門委員である、石上智暁さん（糸岡組萬明寺）と瀧山志穂さん（氷見西組願正寺）がそれぞれ行なった。

石上さんは、二〇一三年に靖国神社を参拝した安部首相について諸外国の反応やそれに対する首相の答弁を中心に発表し、中でも神社内にある鎮霊社（靖国神社本殿に祀られていない方々の御霊と世界各国すべての戦死者や戦争で亡くなられた方々の霊が祀られている。但し、本殿のように顕彰する場所ではなく誰が祀られているかわからず建設理由は不明）について、安倍首相が歴代総理で初めて参拝したことに対して、「この本の著者が、この事実を『姑息』と言われたが、鎮霊社自体の成り立ちが不明瞭すぎるから、ここを手がかりに靖国自体の理解を深めることはできないのか」と述べられた。

また、靖国神社は「国内問題」なのではないかと言われ、合祀は第二次大戦までで、朝鮮戦争の海保隊員は戦死者と認められないため、合祀もされていないことを例に挙げ、「他にも辻褄が合わないことが多い」と発表された。

続いて、瀧山さんは、この本の表紙に書いてある「問題は歴史認識！中国・韓国の批判はただの言いがかりなのか？批判されているのは追悼行為ではない。先の戦争は正しかったという靖国の歴史観は、戦後の平和秩序をご破算にする！」という帯を注目し、著者が言いたかったのは、靖国神社の歴史問題が言いたかったのではと述べられた。

また、自身の法務の折に門徒の方々に聞かせていただいた話を中心に述べられた。特に、戦争を経験された方が、次の世代にこのようなつらい思いをさせたくないという思いや、富山大空襲の時に、氷見でも空襲警報が鳴りB29爆撃機が上空に飛んで行くのが見えたことから、死を覚悟し、目を閉じていたがしばらくして開けると、富山の市街地が赤く燃え上がっているのが見えたことを話された。

全体会では、この発表を受けて様々な意見交換がされ、第一回目は終了した。

尚、第二回は六月二十三日午後七時から開催される。また第三回目は、七月七日にフィールドワークが行われ、石川県にある石川護国神社及び野田山墓地を見学する予定。（※別紙ちらし参照）

たすけあい運動募金　「ネパール地震災害義援金」ご協力のお願い

2015(平成27)年4月25日にネパール連邦民主共和国を震源とするマグニチュード7.8の地震が発生し、首都カトマンズを中心にインド等の周辺国においても甚大な被害をもたらしました。　5月１５日にはネパール内務省報道官が地震による死者8,460人・負傷者2万人以上になったことを発表。ネパール国内では混乱が続き、復興支援ではなく未だに救援活動が必要な状態です。

宗派においては、首都カトマンズに「ネパール開教事務所（ソナム・ワンディ・ブディア所長）」(カトマンズ本願寺)を置き、活動の拠点としています。

高岡教区では災害対策専門委員会での協議に基づき、被災地の一日も早い復興を願い、宗門の「たすけあい運動募金」における災害義援金に協力することとし、標記義援金の呼びかけをすることといたしました。

つきましては、何とぞ趣旨をご理解いただき皆さまにご協力をお願いいたしたく、下記の通りお願い申しあげます。

記

１．名称　　浄土真宗本願寺派　たすけあい運動募金「ネパール地震災害義援金」
２．振込　　同封の振込用紙をお使いください
３．期間　　２０１５年４月２７日（月）から７月３１日（金）まで
４．お問い合わせ　〒600-8501　京都府京都市下京区堀川通花屋町下ル
浄土真宗本願寺派宗務所伝道本部　社会部災害対策担当
TEL０７５－３７１－５１８１
FAX０７５－３６５－６１９９

以上

◇御同朋の社会をめざす運動のコーナー

御同朋の社会をめざす運動』教区委員会委員研修会報告

去る五月十一日から十二日にかけて、磯はなびに於いて「御同朋の社会をめざす運動」教区員会研修会が開催され、教区委員・専門委員・組長・組主幹・副主幹ら五十六名が参加しました。

一日目の研修では「運動のあり方を考える―三ヵ年計画を終えて―」をテーマに研修が行われました。

伯水永雄さん（教区副委員長）の問題提起では、「現在の実践運動は基幹運動を継承していくということになっていますが、従来の基幹運動の理念とは『本願を究極の拠りどころとして生きられた親鸞聖人に学び、（中略）、私と教団の体質を改め、差別をはじめとする社会の問題に積極的に取り組み、御同朋の社会をめざす運動』です。これは単なる理想を述べているのではなく、これとは反対の現実があるという現状認識に基づいてこの文言が作られました。」「それには必ずしも本願を究極の拠りどころとしてこなかった教団の現実があります。例えば一九四五年まではこの社会を生き抜くために天皇制を拠りどころとして生きてきたという事実があり、あるいは日常生活の中で在家仏教だからと言って世俗の価値観に染まり迎合し、部落差別を始め、教えに背くようなことをしてきたという現状認識から出発してこの文言が生まれたと聞いています」「伝統教団だからと言って今までやってきたことを是とするのではなく、教団と私の体質を改めていこう、『差別をはじめとする社会の問題に積極的に取り組み』という文言は教団の実態はそうではなかったという歴史的事実から出発しています」と述べ、また、これらの活動理念は宗門法規や教団からの提起で出来上がったのではなく、現場での運動が先にあり、その運動を教団化していくという取り組みの中で作り上げられていったこと、またこのような運動が進み、教団化していこうとしたときに、常に逆行しようとする動きが戦後の運動にもあったことを挙げられ、そのように運動も紆余曲折を経ながらも、①基幹運動の理念は、親鸞聖人の教えに背いてきた教団の実態を改めていくこと（真宗の本来化）、②現場・現実から学び、出発すること、③点検と往復運動、④課題の共有と参画の重視、⑤宗務機関主導から推進委員会活動の重視、⑥教学（教えの受け止め）は勧学等の専門家の専権事項ではなく、一人一人のものであること、の六点が三十年間の運動の中で確認されてきたことと提言されました。

その上で、前三ヵ年計画を終えて提出されたこの度の宗門の実践運動新計画骨子案については、総合テーマが変わり、重点プロジェクト例の提示が無くなり、何でも好きにやっていくというスタイルになったことが大きな変更点であるとし、骨子案に対する各組からの意見集約では「私たちの先人はそのお心を受け、とも御同朋・御同行と互いに敬愛し、み教えを広め伝えていこうとされました、という表記があるが、部落寺院や門信徒を排除してきた現実を認識し、それを克服していこうという認識に立っていたのが基幹運動であり、それを互いに敬愛してきた、という認識に立つなら、それは基幹運動の理念とは異なる」等の意見が出されたことを挙げられた。

また、「宗教の本来の社会貢献とは何なのか、歴史的事実から学ぶことも重要です。教団には負の歴史があり、それを踏まえた上で、現状と今後を考えていくこと、聖人の教えが何をもたらすのかを、それぞれの現場の中で問い尋ねていく事が大事だと思います」「私たちはどんな思いで運動し活動し、取り組んでいるのか。そういうことをお互いがまず確認しあいましょうというのが、運動計画や理念というものであったと思っています。①どんな思いで、②何を目指して、③どうしていくのかの三点が、私たちの教団が特に戦後の運動の中で重視してきたことではなかったかと思います」と提起されました。

それを受けた話し合いでは、「何でもやってくださいでは、何をしていいか分からない」「どのような課題が浮上し、どのような成果しか上げられなかったのか、それを教区や組といった現場との往復運動がないままに策定されたため、具体性や現実味のない内容になってしまっている」「親鸞聖人の教えの受け止めが問い直されたのが、基幹運動の始まりであったと思う。宗勢拡大のため戦争に協力し、世俗権力に迎合し、差別

を世の習いとして肯定するような浄土真宗ならば世に広まってはならない、その出発点を忘れ、世間に評価されることを重視する実践運動は基幹運動の理念とは全く異なる」「基幹運動も実践運動も内向きに過ぎるのではないか、宗門内だけでなく時勢にもっと目を向けるべきで、この混迷する世の中に有って何が世の苦しむ人々の灯となるかを考えていただきたい」と、実践運動や総合基本計画骨子案に対する批判が目立つ一方で、「今までの縛りが無くなってやりやすくなった面もあるのでは」「今までが部落差別だけに特化し過ぎであったのでは」と評価する意見も一部に見られました。

講師の登尾唯信さん（宮崎教区・実践運動中央委員）からの助言では、「現在の運動は現場との往復運動がなく、従来とは異質な運動であるとし、現在の計画は『何でもやってくださいでは、何をしていいか分からない』という意見に代表されるように動機の必然性が見えてこない計画である」とした。また、「だからやりたくない問題は外されていく、『今までの縛りが無くなってやりやすくなった』という正直な意見にもあるように、非戦平和、差別やヤスクニが外されていくことにつながる」と指摘。「特に顕著なのは被差別者の怒りの声が聞こえなくなっていった。出しにくくなった。そういう声に向かい合ってきたのが基幹運動。だが、現場からではなく、教団からの提起で始まった実践運動では、それらの声が反映されなくなってしまっている」「三悪道の現実から浄土が建立されたように、苦悩の現実から出発する、そういう姿勢が必要ではないのか。そのためにはやっぱり被差別者の、いわゆる弱者の視点に立つ、どこの視点に立とうとするのか、そこが問われている」「どの視点に立つのか、どの立場に立つのか、それが無い限り教団は社会の中に埋没していってしまう」と、宗門の計画もそれと同じ問題を抱えており、実際に現実の社会問題に対して何一つ公的な声明を出せないのが実情だと指摘された上で「私たちもまた過去の歴史的事実に学ぼうとしないならば、かつてと同じ過ちを繰り返すこととなる。だからこそボトムアップの形で言い続けないといけないし、これまでの課題には継続的に取り組んでいかなければならない」と助言されました。

二日目の研修では、「組活動は何をめざすのか」というテーマで研修が持たれ、島高志さん（新湊組門徒推進員）と飛鳥寛静さん（若神組主幹）が問題提起され、「連研活動を通じて組活動において僧侶と門徒推進員の連携の重要性ということが認識されるようになったものの、未だ僧侶や教化団体との連携には課題が残る」「諸課題の克服のためにはさらなる『ボトムアップ』と『話し合い』、そのために教化団体同士の連携の構築が重要」（島さん）「日常の法務の繰り返しの中で何のために寺院活動しているのかが見失われていき、組活動も同じで行事消化を繰り返す中で組活動の目的も見失われているのではないか」「今まで仏法に出会ってこなかった方たちが仏法に出会い、そのことをよろこびとする人たちを育てていくためにあるのが組活動だと思う。しかし僧侶が法務に追われ、連研を始めとする活動を面倒臭がるという傾向があるのが一番の問題点ではないか」（飛鳥さん）と提起されました。

全体会での班別報告では「組間、寺院間に温度差がある」「組織活動は何のために？そのことを問いなおす必要がある。」「組というのは行政単位であり、運動体として組織されたわけではない。地域社会が弱体化していく中で、組という区切りではなく有志での取り組みも良いのではないか」「寺は敷居が高いと思われているが、それは門信徒よりも僧侶側の意識を変えていかなければならないのでは」との意見が出されました。

講師のまとめでは、かつては組活動が活性化すれば寺院活動も活性化するという期待があったとし、実際に門信徒と僧侶との溝や敷居を埋めるものが組活動にはあると述べられた。

その例として組活動で連研が行われてきた事を挙げられ、「様々な課題は山積しているものの、その中で僧侶と門信徒が互いに何を考えているのかがわかってきた、敷居を作り出している互いの意識差を克服していったという面がある」とした。

その上で「お寺は、住職家の生活の場だけになってしまっている。その現状に埋没するなら組活動も寺院活動も目的を見失い、尻すぼみになっていく」と述べられ、その克服のためにも僧侶と門信徒が話し合いというものを続けていく、その場を設ける努力をしていくことが重要だと提言された。

【高岡教区教務所職員　岡西　好持】

◇これからの日程（6/２０～7/２０）◇

6月		
20	福光教堂降誕会	
22	減免審査委員会・常備会	
	寺青４０周年実行委員会	
	寺青声明サークル	
23	サンセリテビハーラ活動	
	教区委常任委員会	
	非戦・平和公開学習会	
24	長寿苑ビハーラ活動	第２連区少年連絡協議会（～２５・岐阜）
	教区コーラス練習日	
	教学研究室	
	善進座公演（高岡文化ホール）	
25	講社連盟役員会	
	寺院女性会連盟研修会	
26	富山仏教学会例会	B組長会打合せ会（福井）
27	まことの保育研修会	
	保育理事会	
30	財団評議員会	
7月		
1	雨晴苑ビハーラ活動	
	龍谷教学会議例会	
2	富山解放連総会・研修会	
3	高寿会総会	
4	仏婦真宗入門講座	
	臨時教区会	
6	少年連盟総会	
	宗育巡回日程打合せ会	
7	非戦平和学習会現地学習会	
	教区コーラス練習日	
8	寺青声明サークル	宗務懇話会（富山）
10	臨時教区会	
14	常例法座	
17	会館永代経	
19	仏壮研修会	

編集後記

「原爆は、戦争とは関係のない、多くの人々を犠牲にした。原爆投下は、戦争終結に必要だったかもしれない。でも、はたして、二つも原爆を落とすべきだったのだろうか？」マンハッタン計画に関わった唯一の女性科学者があるインタビューで述べた言葉です。

確かに、アメリカ側から見れば、戦争を終わらせるためには“原爆は必要であった”という認識があるかもしれません。しかし、原爆投下により多くの人々が犠牲になったという事実は変わることはなく、現在も後遺症に苦しんでいる方々もおられます。

七十年が経ち、当時の検証が様々な形で為される中、未だ世界の至る所で紛争（戦争）はなくならず、新たな犠牲を生み出している状況であっても、どこかで他人事になっている自分に反省と原爆について、再度考えるきっかけ与えてくれた冒頭の言葉です。

（担当）

ラジオ放送～西本願寺の時間～

『みほとけとともに』

北日本放送（KNB）・７３８kHz.

◎毎週土曜日（本山制作）午前6:15～6:25

□第２・４日曜日（富山・高岡制作）午前6:00～6:10

◎6／13（土）：釋　徹宗　氏（相愛大学教授）

「ご門徒さんの声を聞いて」

□6／14（日）：古石 夏丸　氏（高岡教区・圓勝寺）

◎6／20（土）：釋　徹宗　氏（相愛大学教授）

「受け継ぐということ」

◎6／27（土）：釋　徹宗　氏（相愛大学教授）

「宗教を学ぶ「寺子屋」」

□6／28（日）：林　要昭　氏（高岡教区・明覚寺）

◎7／4（土）：釋　徹宗　氏（相愛大学教授）

「未　　定」

◎7／11（土）：未　　定

□7／12（日）：未　　定　（富山教区）

【西本願寺高岡会館７月の常例法座】

ご講師：**石　崎　博　敍**　師

（大阪教区・大圓寺）

ご講題：『浄土真宗のすくいとあゆみ』

※今年度から１４日が常例法座の日となりますのでお間違いのないようにお参りください。

☆お知らせ☆

『法輪せんべい』販売について

お茶菓子やご法事・ご法座の折のお扱いにいかがでしょうか。お申し込み先は下記のとおり。

FAX.でのお申し込みも承ります。どうぞご利用下さい。

一袋二枚入りで価格は次の通り

※　一袋二枚入りで価格は次の通り

- 特大箱（175袋）　８，３００円
- 大　箱　（36袋）　２，３００円
- １　組　（10袋）　　５００円

お申込み先は･･･〒933－0003　高岡市能町１２９８

耳浦　康真（本誓寺）　Tel.＆Fax.(0766)23-9822